奈良における世界遺産教育

―シルクロードの文化を中心にしてー

中澤静男
（済美小学校）
教授　田渕五十生
（奈良教育大学社会科教育研究室）

World heritage education in Nara
―Mainly on culture of the Silk Road―

Shizuo NAKAZAWA
(Seibi Elementary School Nara)
Isoo TABUTI
(Departmennt of Social Study，Nara University of Education)

要旨：奈良県に３つ世界遺産がある。国内に３つも世界遺産があるのは奈良県だけであり、世界遺産の保護・保存の義務を遂行し、その意義を内面化させる意図的な教育が必要であり、世界遺産を教材化した学習活動を展開することは、奈良県の特色ある教育活動となる。本稿では、特に「古都奈良の文化財」に注目し、シルクロードとの関連から比較検討する世界遺産として、ウズベキスタンにある４つの世界遺産を取り上げた。世界遺産を切り口として、東西文化交流を明らかにすることで、世界遺産教育の意義を明確にし、文化遺産の保護・国際理解・人権・平和・環境教育等へ発展できる学習活動を展開することができる。さらに本稿では、小学校の「総合的な学習の時間」・中学校社会科歴史教育における世界遺産教育のモデルを提案する。

キーワード：世界遺産教育World Heritage Education　シルクロードSilk Road
ウズベキスタンUzbekistan　文化交流Cultural exchange

1．はじめに

1993年に法隆寺地域の仏教建造物群が世界遺産に登録されて以来、2005年現在、日本には13の世界遺産がある。奈良県には「法隆寺地域の仏教建造物群」、「古都奈良の文化財」、「紀伊山地の聖地と巡礼路網」の３つ世界遺産がある。国内で３つも世界遺産があるのは奈良県だけで、世界遺産の保護・保存の義務を遂行し、その意義を内面化させる意図的な教育が必要であり、世界遺産を教材化した学習活動を展開することは、奈良県の特色ある教育活動となる。

この世界遺産教育は、新しい教育課題であり、ユネスコを中心に世界各地で世界遺産を教育に導入する試みがなされているが、日本で「世界遺産教育」というテーマで取り組んだ教育実践は、管見する限り見あたらない。

世界遺産を学習する上で忘れてはならないことが二つある。一つは国内の世界遺産を外国の世界遺産と重ね合わせて学習することである。海外の世界遺産と比較することで、国内の世界遺産を学習する際に陥りがちな、自文化の卓越性のみを強調する自文化中心主義から脱却できるからである。二つめは、身近に世界遺産を持たない地域での学習についての配慮である。事実、世界遺産を身近に持たない地域がほとんどである。それらの地域においても世界遺産を学ぶことで、地域にある文化遺産に対する関心を高め、海外との文化交流の視点から見つめ直し、文化遺産を大切にしようという意識や態度を育成する契機にすることができる。

本稿では、奈良の世界遺産と共にウズベキスタン共和国の世界遺産を取り上げている。ウズベキスタン共和国はシルクロードのオアシス都市として栄えた歴史があり、シルクロードの終着点とも呼ばれる正倉院を含む奈良の文化と強い関連性がうかがえる。シルクロードを介した文化の伝播としては、東大寺二月堂のお

水取りとゾロアスター教の関連はよく知られている。ゾロアスター教は別名、拝火教と呼ばれ、お水取りのお燈明（たいまつ）や堂内での炎の祭儀と共通している。また、仏像文様に見られる図像学的（イコノグラフィカル）な共通性が濃厚である。けれども、影響が指摘されているのは、ギリシアやイラン、インドやガンダーラ、そして中国・朝鮮の文化である。それらの文化をつなぐ中央アジアについては、依然として空白地帯となっている。そこで、世界遺産を切り口として、ウズベキスタンの歴史や文化を日本と比べることで、シルクロードを媒介とした東西文化交流の全容を視野に入れることが可能となる。その文化交流史に奈良・日本の文化を位置づけ、自文化を見つめなおす契機にしたいと考えたのである。

本稿では、まず世界遺産の意義を概略し、奈良にある世界遺産の価値を明らかにする。次に、ウズベキスタンの文化や歴史を素描し、その４つの世界遺産について紹介する。そして小学校の「総合的な学習の時間」、中学校社会科の歴史分野における、奈良とウズベキスタンの文化や世界遺産の比較を切り口にした世界遺産教育について教材開発を行なう。最後に今後の世界遺産教育のあり方について若干の提案を行なってみたい。

２．世界遺産とは

（１）世界遺産の意義

世界遺産とは、「世界遺産条約」（「世界の文化遺産および自然遺産の保護に関する条約」）に基づき、ユネスコの世界遺産リストに登録されている世界的に顕著な普遍的価値をもつ記念工作物、建造物群、遺跡、自然の地域など国家や民族を超えて未来世代に引き継いでいくべき人類共通のかけがえのない自然と文化の遺産[1]である。そして世界遺産は「世界遺産条約」によって、文化遺産と自然遺産、複合遺産に分類されている。

文化遺産とは、すぐれた普遍的価値を持つ建造物や遺跡などで、奈良県にある３つの世界遺産は、すべてこの文化遺産として登録されている。

自然遺産とは、すぐれた価値をもつ地形や生物、景観などを有する地域であり、日本の世界遺産では、白神山地、屋久島、知床がこれにあたる。

複合遺産とは、文化遺産と自然遺産の両方の要素を兼ね備えているものである。

2005年７月現在、世界遺産リストに登録された文化遺産は628、自然遺産は160、複合遺産は24で総計812ある。これらの世界遺産をもつ国は137カ国であり[2]、日本は1992年に「世界遺産条約」の締約国となり現在に到っている。

自国の文化財が世界遺産として登録されることは名誉なことではあるが、登録に伴う義務や責任も生じる。「締約国は、第一条及び第二条に規定する文化遺産及び自然遺産で自国の領域内に存在するものを認定し、保護し、保存し、整備し及び将来の世代へ伝えることを確保することが第一義的には自国に課された義務であることを認識する。このため、締約国は、自国の有するすべての能力を用いて並びに適当な場合には取得し得る国際的な援助及び協力、特に、財政上、芸術上、学術上及び技術上の援助及び協力を得て、最善を尽くすものとする。」（世界遺産条約第４条）と明示されている。このことから、奈良の小・中学生が世界遺産について学習し、その人類的、歴史的価値を理解し、世界遺産を保護しようとする態度を養うことは意義深い学習である。

（２）奈良の世界遺産

奈良の文化財が世界遺産リストに登録されたのは、1998年である。奈良の文化財は次の８つの資産で構成されており、８遺産全体で物語る奈良の歴史や文化の特質が評価され、「古都奈良の文化財」という名称で、全体が文化遺産として登録されている。

東大寺・興福寺・春日大社・元興寺・薬師寺・唐招提寺・平城宮跡・春日山原始林

文化遺産の登録基準には次の６つがある。

① 人間の創造的才能を表す傑作であること。
② ある期間、あるいは世界のある文化圏において、建築物、技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展において人類の価値の重要な交流を示していること。
③ 現存する、あるいはすでに消滅してしまった文化的伝統や文明に関する独特な、あるいは稀な証拠を示していること。
④ 人類の歴史の重要な段階を物語る建築様式、あるいは建築的または技術的な集合体、あるいは景観に関する優れた見本であること。
⑤ ある文化（または複数の文化）を特徴づけるような人類の伝統的集落や土地利用の優れた例であること。特に抗しきれない歴史の流れによってその存続が危うくなっている場合。
⑥ 顕著で普遍的な価値をもつ出来事、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または実質的関連があること。（極めて例外的な場合で、かつ他の基準と関連している場合のみ適用）[3]

これらの登録基準の内、奈良の文化財の場合は②、③、④、⑥の４つがあてはまり、世界遺産リストに登録された。また奈良市のホームページには、次のように明記されている[4]。

さらに、古都奈良の文化財は、春日原始林をはじめ、

奈良公園の緑や鹿などの豊かな自然環境に抱かれており、複合遺産としての要素も兼ね備えていると考えられる。

(2)ー芸術や技術の発展をもたらした重要な文化交流を示すものー

中国や朝鮮との交流によつて日本の文化が大きく発展したことを示しています。

(3)ーある文化や文明の極めて貴重な証拠ー

古代の日本の首都に開花した文化を伝えるきわめて貴重な証拠です。

(4)ー人類の歴史の上で重要な時代を物語る優れた実例ー

日本の国家や文化の基礎が整った重要な時代である奈良時代の様子を伝えています。

(6)ー普遍的な意義のある事柄と密接な関連があるものー

神道や仏教など日本人の信仰と密接な関係があり、年中行事などを通じて市民の暮らしの中に生き続けています。

次に2005年８月に筆者らが視察したウズベキスタンの文化や歴史について概観し、その世界遺産を紹介する。

３．ウズベキスタンについて

（１）ウズベキスタンの捉え方

ウズベキスタンは、トルクメニスタン・キルギス・タジキスタン・カザフスタン・アフガニスタンに囲まれた海のない国である。2005年９月現在、人口は約2600万人で、日本の約1.2倍の国土をもつ。民族的には、ウズベク人（77.2%）、ロシア人（5.2%）、タジク人（4.8%）、カザフ人（4.0%）、カラカルパク人（2.1%）、タタール人（1.4%）、キルギス人（0.9%）、トルクメン人（0.6%）と多様である。その他にソビエト時代に強制移住させられた朝鮮人、ドイツ人も在住している[5]。

宗教はイスラム教スンニ派が優勢で、ウズベキスタン人のイスラム教は緩やかなものである。これには、1991年のソビエト連邦崩壊までの70年間のソビエト社会主義政権の宗教弾圧政策が影響している。多くのモスクは社会主義時代に倉庫として使用されていたという。

また現在のウズベキスタンの民族構成を見ても明らかなように、非常に多様性に富んでいる。この傾向はウズベキスタン周辺の国々も同じである。この地域に住む人々は遊牧民とオアシスでの定住農耕民であったが、気候変動による移動、シルクロードに関連する富を求めた為政者の侵略、小規模なオアシス国家同士の衝突､チンギス・ハンやチムールによる大帝国の建設、奴隷獲得を目的とした略奪、ロシア帝国による植民地化、ソ連による併合等により、古くから民族の交流が行われた地域なのである。つまり、ウズベキスタンという一国家を枠組みとするのではなく、中央アジアという広大な範囲を視野に入れ、中央アジアの歴史や文化の中でのウズベキスタンという捉え方をすることが妥当である。

次に中央アジアのウズベキスタン地方の歴史を概観し、４つの世界遺産の歴史的位置を明らかにしたい。

（２）ウズベキスタンの歴史

紀元前よりこの地方には、多数の民族が政権を樹立しては滅亡していった。現在のウズベキスタン地方の文化に影響を与えたと考えられる主なものについて概観する。

①　ペルシア文化の伸張

紀元前６世紀にイランに勃興したアケメネス朝ペルシアが、インド北西部のガンダーラ地方から西はエジプト、北はソグディアナ（サマルカンドとブハラを中心的な都市とするザラフシャン川流域地方の古名）に達する大版図を手中に収めた。ペルシアは大領土を保つため、「王の道」という公道を建設した。それにより、パミール高原の西方からヨーロッパまでの交通路が開けた[6]。

②　ギリシア文化の影響

紀元前４世紀、アレキサンダー大王が東征し、サマルカンド等を攻略する。

③　シルクロード交易の開始

紀元前139年、漢の張騫が大月氏（サマルカンド）に向けて出発する。紀元前126年に帰国し、中央アジアの情報をもたらす。それ以来、中国の絹を中心としたシルクロード交易が活発化する。

④　仏教の影響

紀元２世紀のカニシカ王の頃、アフガニスタンからインド西北部、東西トルキスタン（新疆ウイグル自治区・カザフスタン・キルギスタン・トルクメニスタン・ウズベキスタン）の一部にいたる大版図を統治した。カニシカ王は仏教の保護者であったため、仏教が広まると共に仏教文化が普及し、美術的にはガンダーラ美術と呼ばれ、その影響は日本にも見られる。

⑤　中国文化の影響

７世紀、唐が突厥を滅ぼし、中央アジアを支配する。ソグド人が盛んに東西交易を行い、長安でイラン文化が流行する。また当時多くのソグド人・ペルシア人が長安に移住し、技術や文化を伝えたと考えられ、奈良にも伝わっている。その典型が正倉院御物の漆胡瓶やカットグラスなどである。

⑥　イスラム文化の誕生

750年にウマイア朝を破ったアッバース朝が北アフリカ、地中海からイラン、ソグディアナにいたるイスラム帝国を打ち立て、イスラム教を基盤としつつ、ヘレニズム文化とイラン文化、インド文化を融合させた独自のイスラム文化（サラセン文化）を生んだ。このイスラム文化は活発な交易活動を行っていたイスラム商人により、中央アジア一帯に広く伝えられた。

⑦　チンギス・ハーンによる破壊

1219年、チンギス・ハーンの西征が始まり、翌年、ブハラ、サマルカンドが攻撃され、破壊される。

⑧　チムール帝国の建設

1370年、チムールがウズベキスタン地方を支配し、サマルカンドを都とする。さらに、オスマン・トルコも破り、中央アジアから西アジア一帯を征服し、チムール帝国を建国する。

⑨　ロシアによる占領

1868年にロシア軍に占領され、ブハラ汗国、ホレズム汗国、ヒヴァ汗国がロシアの保護国となる。

⑩　社会主義化と独立

ロシア革命の影響で、ウズベク・ソビエト社会主義共和国となり、1991年のソ連邦崩壊により、ウズベキスタン共和国として独立した。

（3）ウズベキスタンの世界遺産

ウズベキスタンには4つの世界遺産がある。

①　ヒヴァのイチャン・カラ（文化遺産・1990年登録）

②　ブハラの歴史地区（文化遺産・1993年登録）

③　シャフリサーブスの歴史地区（文化遺産・2000年登録）

④　サマルカンド－文明の十字路（文化遺産・2001年登録）

以下、それぞれの世界遺産について素描する。

ⅰ）ヒヴァ

アムダリヤ川の水利事業で潤沢に水を得て繁栄したヒヴァ・ハン国の都であった。町は外敵の侵入を防ぐために、二重の城壁が築かれている。外側には1842年にカラクム砂漠との境に築かれたディシャン・カラと呼ばれる城壁があり、内側の城壁内はイチャン・カラと呼ばれ、宮殿やハーレム、モスク、メドレセ（イスラムの神学校）が建てられた。イチャン・カラには、20のモスク、20のメドレセ、6基のミナレット（塔）をはじめとする数多くの遺跡が残されており、1969年には全体が「博物館都市」に指定され、1990年ユネスコの世界遺産に登録された。

そこで文化の融合性を示す教材を発見した。それは道に面したモスクの壁面である。下層にゾロアスター教を象徴する文様が刻印されたレンガがあり、その上にイスラムの幾何学文様のレンガが積み上げられている。また最近の調査では、その壁面は仏教遺跡の上に建築されているというのである。言うまでもなく、文化は融合し重層するのである。どの文化も孤立して存在するのではなく、交流して融合され、生成されるものであることを確信させられた。

［ゾロアスター教の文様が刻印されたレンガ］

ⅱ）ブハラ

中央アジアの乾燥地帯の中に位置しながら水資源に恵まれたブハラは紀元前5世紀には都市が成立していた。9世紀後半、サーマーン朝の都となり、マムルーク（奴隷軍人）の交易と結びついた商業都市として、イスラム文化の中心都市として発展する。しかし、1220年のチンギス・ハーンの来襲により、市街地はことごとく破壊されてしまう。

1512年、ウズベク族のシャイバニ朝がチムール帝国を滅ぼし、ブハラを首都としたブハラ・ハン国を建国する。それ以来「聖なるブハラ」と呼ばれ、イスラム世界全体の文化的中心地として繁栄する。シルクロードの面影を色濃く残すブハラの街並みは、この頃に完成し、今日までほとんど変化していない。

ブハラには、モンゴル来襲時にほとんど土中に埋もれていたために破壊をまぬがれた、中央アジア最古のイスラム建築であるイスマイール・サーマーニ廟がある。廟には、イスラムの聖地として多くの巡礼者が訪れている。1127年にカラハーン朝によって建設されたカラーン・ミナレット、カラーンモスク、ソ連時代も唯一活動していたミル・アラブ・メドレセ、チムールの孫であるウルグベクが建てた中央アジア最古の神学校であるウルグベク・メドレセなどがある。また、通りの交差点を丸屋根で覆ったバザールであるタキが、数多く存在している。これらはイスラム文化を象徴したものである。

その他に世界遺産に登録された建築物としてマゴキ・アッタリア・モスクがある。これも砂丘から発掘されたものである。その壁面は3層からなっている。このモスクは、アラブに支配されるまではゾロアスター寺院でもあった。一番下がゾロアスター教文様の彫刻されたレンガの層、その上にイスラムのアラベスク

模様のレンガが積まれている。文化の重層性を示すこの壁面も、格好の教材となる。

［マゴキ・アッタリア・モスク］

ⅲ）シャフリサーブス

チムール帝国を建国したチムールの生まれ故郷。ここにはチムールの像がある。チムール像はウズベキスタンに３つあるが、いずれの像も独立後にカリモフ大統領によって建てられたものである。チムールはウズベキスタン一の英雄であるが、チムールについては、旧ソ連邦時代は無視され続けていた。

ここに「歴史」について考えさせられる興味深い記事がある。1984年にＮＨＫ取材班がシャフリサーブスを訪問したときのものである。彼らはチムールの生地、ホジャ・イルガル村を訪ね、村の古老たちとチャイハナで長時間話をしたが、「老人の昔話には、チムールは出てこない。このホジャ・イルガル村には、残念ながら、今ではチムールに関した遺跡も新しい事実も、何も残されていないようである。」と記している。さらに同村に住むチムールと同名の人物を尋ね、次のようにインタビューしている[7]。

「チムールという名前をどう思いますか」
「チムールは遠征のたびに、その地の住民を何千、何万と虐殺した封建領主です。その名前で人から尊敬されるということは特にありませんでした。」
「ご両親は、なぜこの名前をつけたのですか。」
「私の名前のチムールは、英雄の名前をとったのではなくて、その言葉のもとの意味である鉄を表しているのだと思います。」
「しかし、このホジャ・イルガル村が、英雄チムールの生まれた土地であることも知っているでしょう」
「もちろん、よく知っています。しかしチムールといっても、歴史上の人物ですし、そんなに意識することはありません。」

この老人たち、そしてチムールさんのチムールに対する無関心な様子。ここにはソビエト政府の言論統制が強く表れている。ソビエト時代には、民族意識を高揚させるチムールは、危険な存在だったのである。しかし独立した今は、逆にウズベキスタン国民という国民意識の象徴として、為政者が利用し始めている。「全ての歴史は現代史」（クローチェ）なのである。

ⅳ）サマルカンド

サマルカンドは、シルクロードの中心都市として古代以来有名な都市であった。紀元前４世紀のアレキサンダー大王の遠征軍がサマルカンドに到達し、その美しさに驚嘆したといわれる。また、玄奘三蔵もインドへの求法の旅の途中に、長期に逗留した街である。しかし「オリエントの真珠」と呼ばれたサマルカンドは、チンギス・ハーンの来襲によって、灰燼に帰してしまう。それがアフラシャブの丘である。現在のサマルカンドは、チムールによって帝国の首都として建設された街であり、「チンギス・ハーンは破壊し、チムールは建設した」といわれる所以である。

サマルカンドの中心は、レギスタン広場である。1420年にウルグベクが建設したウルグベク・メドレセ、ライオンのタイル装飾のあるシェルドル・メドレセ、金色に輝く内装のティラカリ・メドレセの３つの神学校が集まっている。また、チムールとその一族の廟であるグリ・アミール廟、中央アジア最大のモスクであるビビハニム・モスク、その向かいにあるチムールの第１夫人であったと言われるビビハニム廟など、サマルカンドブルーに輝くドームが青空に映える、まさに「青の都」である。

４．奈良の世界遺産の教材化

世界遺産を切り口として、他文化との関連から自文化をとらえようとするグローバルな視野を養うと共に、世界遺産の価値を理解しその保護について考察する機会となる世界遺産学習を提案したい。

（１）小学校「総合的な学習の時間」における世界遺産学習（５年生）

ウズベキスタンを視察した際、ヒヴァの歴史博物館で一枚の絵が目に留まった。ヒヴァの神話上の人物がクラッシという格闘技を行なっている絵である。

一方奈良は相撲の発祥の地であり、当麻蹶速と野見宿禰の伝説が伝わっている。

また、ウズベキスタン滞在中によく口にした食べ物にラグマンがある。ウズベキスタン風うどんである。日本のものとは違い、

ポトフのようなスープに麺が入っている。麺はうどんとまったく同じものである。スプーンとフォークを用いて音を立てないで食べる。

クラッシと日本の格闘技柔道、ラグマンとうどんの類似性は、子どものウズベキスタン文化への関心を高めると考え、教材として活用することにした。そして、異文化に対する関心から世界遺産について考える「総合的な学習の時間」の教材開発を行なった。

１．単元名　世界につながる古都奈良の文化財

２．単元のねらい

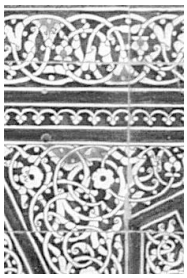
① 奈良や海外の世界遺産に対する関心を高め、意欲的に調べることができる。

② シルクロードを介した東西の文化交流の広がりの中で、奈良の文化を考えることができる。

③ 奈良やウズベキスタンに関する多様な資料を比較検討し、適切に関連付けることができる。

④ 世界遺産のすばらしさを理解し、その保護について自分の考えをもつことができる。

３．単元展開の概要（全10時間）

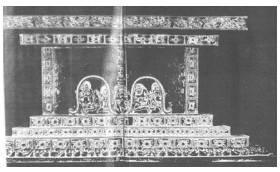
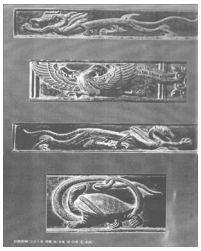
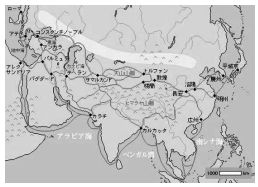
主な学習活動	学習への支援
１．写真から予想しよう。これは何の競技をしているのだろう。	予想を自由に話したり、今までの経験を話したりできるよう、許容的な雰囲気作りに心がける。
	写真①は柔道に見える。しかし２人とも外国人らしいこと、畳ではないことなどに気づいた子どもがあれば、さらに関心が高まるような話し合いを活性化させる。
これは何だろうう。 	写真②はうどんに見える。しかし箸ではなくフォークとスプーンが用意されていることに疑問をもつ子どもがあるだろう。
カラー写真にしてみます。	カラー写真を提示し、柔道ではなく、ウズベキスタンのクラッシという競技であることを紹介する。
（ラグマンを食べてみる）	カラー写真を提示し、うどんではなく、ウズベキスタンのラグマンという食べ物であることを紹介する。
胡瓜、胡椒、胡麻、胡桃などの食物の名前の共通点から、「胡」と呼ばれた国の場所や、どのようにして日本に伝わってきたかを予想する。	なぜ、日本とよく似た競技や食べ物があるのかを考えさせ、予想を話し合わせる。 「胡」とは中央アジアであることを話す。またシルクロードと呼ばれた交通路があったことを話し、奈良が「シルクロードの終着点」と呼ばれている意味を考えさせる。
２．ウズベキスタンについて調べよう。 ① 地理、気候 ② 歴史 ③ 民族や言葉 ④ 産業 ⑤ 世界遺産	図書館やインターネットを利用し、特に世界遺産について調べさせる。
３．奈良の世界遺産について調べよう。 ① 歴史 ② 価値 ③ 文様	奈良の世界遺産を見学し、インタビューなども取り入れ、積極的に調べさせる。
	ウズベキスタン「ヒヴァ」のモスクのタイルであることを紹介し、似たような文様が奈良の文化財にないか探させる。 双方の世界遺産に見られる共通点をシルクロードとの関連から再考する。
４．世界遺産について、考えをまとめよう。	双方の世界遺産の価値と、その保護の大切さ、難しさに気づかせる。

（２）中学校社会科歴史分野における世界遺産学習

中学校の社会科歴史的分野の「天平文化」の項目で世界遺産を題材に次のような教材開発を行った。配当時間は１時間である。OHPまたはパワーポイントを使用して、できるだけ多くの映像を用いて、文化の類

縁性など感性に訴えて理解を深めるように配慮した。以下、単元名、単元の狙い、指導過程について略述する。

1．単元名：奈良の世界遺産とシルクロードの文化
2．単元の狙い
① 奈良にどのような世界遺産があるかについて、「法隆寺地域の仏教建造物群」と「古都奈良の文化財」を具体的に確認する
② 奈良の世界遺産と中国・韓国の世界遺産の比較を通して、文化の共通性と個別性に気づかせる。
③ 薬師寺の台座の装飾文様にシルクロードの文化が凝縮されていることを確認して文化交流の意義、文化の融合性・重層性に気づかせる。
3．単元展開の概要（全1時間）

主な学習活動	学習への支援（準備物）
1．阿修羅像の印象を話し合う。 ［阿修羅像］	阿修羅像についての対話を通して、ペルシアとシルクロードで繋がっていることを確認する。（OHP）
2．法隆寺世界遺産と韓国・中国文化を比較する。 ・ 五重塔と韓国扶徐の石塔 ・ 金堂の壁画と敦煌の壁画 ［法隆寺金堂壁画］ ［敦煌の壁画］	文化交流の実態を通して文化の共通性と個別性に気づかせる。（OHP）
3．正倉院御物とペルシア文化を比較する。 ・ 漆胡瓶 ・ カットグラス	類似性を通して文化交流の実態を確認させる。（OHP）
4．奈良の世界遺産に見られるシルクロード文化の影響を確かめる。 ・ 東大寺大仏と洛陽の龍門の大仏を比較する。 ・ 薬師寺の台座の図柄を検討する。  ［薬師如来台座］  ［四神図］	当時、唐が世界帝国であり、遣唐使を通して文化が流入したことに気づかせる。（OHP） シルクロードの文化が台座に凝縮されていることに気づかせる。 葡萄唐草　ギリシア パルメット　ペルシア 人物像　インド 四神図　中国・韓国 （OHP）
5．ウズベキスタンと奈良の世界遺産を比較する。 ・ ヒヴァの壁面と薬師寺の台座	文化の融合性、重層性に気づかせる。（OHP） モスクの壁に見られるゾロアスター教のタイルに注目させる。
6．シルクロードでつながる奈良とウズベキスタン。  ［中央アジア地図］	シルクロードの地図を通して、ウズベキスタンがギリシア、インド、中国の結節点であることに気づかせる。

5．世界遺産教育とは

（1） 世界遺産教育の定義

日本において、世界遺産教育という用語はまだ定着していない。そして、その実践も殆ど展開されていない。ここでは、筆者らが提案した教材を対象化し、世界遺産教育の概念を明らかにして、その意義について述べてみたい。

世界遺産教育を分類すれば、次の二つに分類できるであろう。

① 世界遺産についての教育

（Education on or about the World Heritage）

② 世界遺産を通しての教育

（Education through the World Heritage）

前者は、文字通り、世界遺産についての知識や理解を深め、その意義を内面化させて、世界遺産の大切さを次世代に伝えようとする態度の育成を目的としている。他の文化遺産や文化財について理解を深める、歴史学習や地域学習の一環として展開可能であろう。

後者は、世界遺産を事例にして、国際理解を深めたり、平和や人権の尊さを自覚させたり、環境の保全の意義を深めたりすることを目的にしている。国際理解教育、平和教育、人権教育、環境教育とリンケージして展開することが可能であろう。

（２） 世界遺産を通しての教育

まず、国際理解教育としての位置づけであるが、世界遺産を通して、国際交流の意義を確認することができる。また、偏狭な愛国主義と結びつくような、「文化の本質主義」的な考えや「自文化中心主義」（エスノセントリズム）を打破することが可能であろう。世界遺産についての教育が、しばしば自国文化の卓越性を誇る偏狭な愛国心教育に結びつきやすい傾向にある。けれども、文化交流の視点から、自国の世界遺産を検討すると、そこには必ず他の文化の影響や受容があり、どの文化も他の文化から孤立しては存在しないという視点が獲得できる。

具体例を「法隆寺地域の仏教建造物群」にとってみよう。1993年に法隆寺地域は、姫路城とともに日本最初の世界遺産として登録された。ここを訪れた韓国の旅行者は、その雰囲気に懐かしい感情を抱くという。古代、韓国からの技術者が建築に関わっているからであろう。特に、五重塔の美しいグラデュエーションは非常に有名である。一番下の屋根の面積が一番上の２倍である。一番上の屋根の一辺を１にして、次の屋根の一辺を１・１、次を１・２，次を１.３，そして最後の屋根の一辺を１・４へと拡げている。ルート（√）２は、約１·4141356･･･であり、１・４は、ルート２の近似値である。日本の観光ガイドはその卓越性について、誇りを持って語っている。けれども、その比例美は韓国の扶余の定林寺をはじめ韓国の石塔に共通している美しさである。また、金堂の壁画であるが、中国の敦煌の莫高窟の影響が一目で分かる。このように法隆寺地区の世界遺産は中国文化や韓国文化と切っても切れない関係がある。

次に「古都奈良の文化財」であるが、東大寺の大仏は、中国洛陽の竜門石窟の大仏をヒントにしてできている。韓国の石窟庵の釈迦如来にも通じるものである。また、二つの塔で有名な薬師寺の伽藍配置は、韓国の仏国寺の伽藍配置と同じである。このように、他の文化との比較を通して、文化の共通性と個別性に気づかせることが可能である。

（３） 文化の融合性を示す典型教材

薬師寺の金堂には、巍巍堂々とした国宝薬師如来が座している。その台座には文化交流の痕跡が目に見える形で示されており、中学生にも容易に「文化の融合性」が確認できる。そこには、四つの図柄がある。一つは外縁のブドウ唐草文様、ギリシアがルーツである。その内側に玉が散りばめられたパルメット文様があり、ペルシア（イラン）がルーツである。その中の人物像は明らかにインド系の人物である。そして４つの側面の中央には四神図が装飾されている。東に青竜、南に朱雀、西に白虎、北に玄武である。同時期、築造された高松塚古墳の壁画にも描かれた図柄であるが、中国、韓国に共通したシンボルである。例えば、李氏朝鮮王朝の宮殿であるソウルの慶福宮の四つの門はその名で呼ばれている。この台座にもギリシア、ペルシア、インド、中国・韓国、シルクロードの文化が刻印されている。

この台座の図柄を通して、どの文化もお互いの影響を受けて存在していることが容易に理解できる。

興福寺の阿修羅像は国宝に指定され、多くの人々に感銘を与えている。阿修羅はペルシアの神であり、インドに入り悪しき神となる。その後釈迦に出会い、改心し、ひたすら仏法を求め、釈迦の眷族（守護神）となるのである。表情豊かな顔立ちは、当時中国で流行した脱活乾漆という当時のハイテク技法で作成されたものである。したがって、あの小さな彫刻に、シルクロードの文化が凝縮されているということができるであろう。

世界遺産に指定されたこれらの文化財は、過去の文化交流の結果を如実に示している。その事実を確認することは、「これが日本文化の特質である」とか、「確固たる日本文化が存在する」というような「文化の本質主義」を打破すると共に、自文化中心主義（エスノセントリズム）の克服に有益で、国際理解教育の重要な教材になるものと確信している。

６．おわりに

世界遺産を通しての国際理解教育の可能性について検討してきたが、世界遺産を通しての平和教育、人権教育、環境教育との連携も考えられるであろう。

例えば、「古都奈良の文化財」は、春日原生林をはじめ美しい緑の自然環境に囲まれており、むしろ自然と一体になって世界遺産に指定されたと言うべきであろう。そのような自然環境が破壊され、木々の緑の縁取りがない寺院や神社などの建造物がむき出しの光景は、文化財としての価値を半減させてしまう。そこから環境教育の重要性も学べるはずである。

また、平和であったから文化遺産が守られてきたのである。ルーツを同じくする、アフガニスタンのバー

ミアンの大仏はイスラム原理主義者によって爆破されてしまった。平和がおびやかされたなかで、偏狭な原理主義が台頭したのである。また文化遺産の破壊の前に、女性の人権は抑圧され、ブルカ（顔を覆うマント）を強制されていた。

ナチスによるホロコースト（ユダヤ人大量虐殺）の100年以上も前に、ドイツの詩人フリードリッヒ・ハイネは「本を焼く者は人間を焼くだろう」と警告していた。まさにその予言通りになった。この文化遺産をめぐる悲劇は、平和や人権の大切さを実感させてくれる。

第二次世界大戦中、奈良の多くの仏像が空襲を想定して、山中の洞窟に疎開されていた。もし、寺院や神社などの建築物が焼かれていたら、それらの仏像は博物館というカプセルの中でしか見ることができないはずである。そうであれば、仏像の持つ宗教的な雰囲気や感銘は台無しであろう。したがって、世界遺産そのものが平和の尊さを訴えている。

最後に、身近に世界遺産がない地域で、どう教材化するかである。奈良や京都、姫路や日光、宮島などを除く、世界遺産を有しない地域では世界遺産教育は不可能かという疑問が湧いてくる。けれども、どの地域にも、それぞれの地域を代表する文化遺産が身近に存在している。その地域の文化遺産を通して、文化遺産の価値やかけがえのなさを理解させ、それを次世代に伝える権利と義務があるという自覚を育むことは可能であろう。

世界遺産教育、ならびに地域の文化遺産教育は、観光資源の宝庫だけでなく、国際理解教育、環境教育、平和教育、人権教育に繋がる教育の宝庫なのである。

註

（１）古田陽久（2002）『世界遺産ガイド―中央アジアと周辺諸国編―』p．6

（２）社団法人日本ユネスコ協会連盟
http://www.unesco.jp/contents/isan/toha_index.html

（３）青柳正規監修（2003）『ビジュアル・ワイド　世界遺産』小学館p．3

（４）奈良市ホームページ
http://www.city.nara.nara.jp/kokon/isan/gaiyou02.htm

（５）ウズベキスタン共和国
http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/uzbekistan/data.html

（６）長澤和俊（1994）『新シルクロード百科』雄山閣出版p．35

（７）ＮＨＫ取材班（1984）「草原の王都」井上靖・加藤九祚・ＮＨＫ取材班『シルクロード　ローマへの道　アジア最深部　ソビエト（２）』日本放送出版協会　pp．210－213

参考文献

田渕五十生（2005）「シルクロードの世界遺産を訪ねて」『高円史学』第21号pp．51－68